

「通訳教授法ワークショップ 2002」報告

鶴田 知佳子

(目白大学)

2002年9月1日～2日の2日間にわたって、日本通訳学会教育 SIG 有志による「通訳教授法および教材開発研究プロジェクトチーム」が主催する「通訳教授法ワークショップ 2002」が、大東文化大学（板橋校舎）通訳演習室にて開催された。ワークショップの内容は次ページのプログラムにあるとおりであるが、以下、その報告を兼ねて各セッションの概要を簡単にまとめておく。なお、各発表内容については、あくまでも筆者が理解した範囲での要約であり、その内容についての責任はすべて筆者にあることをお断りしておく。

1 日目

[Session 1 (a)] 全体討論・問題提起：「通訳訓練法テキスト」および「教材データベース」について（染谷泰正）

本セッションでは、まず染谷会員が 1) プロジェクトチーム立ち上げの経緯とその趣旨、2) 「通訳訓練法テキスト」と「教材データベース」の概要、および 3) 本ワークショップの趣旨等について簡単に説明し、あわせて2日間のスケジュールを確認した。

本ワークショップは、参加者各人がそれぞれの教育現場で実際にどのような内容のものをどのような手法で教えているかについて、模擬授業あるいは事例研究のスタイルで紹介しながら、通訳教授法および教材開発について互いに意見・情報を交換し、研鑽を積むことを目的に開催したものであること、およびワークショップの性格上、参加者は日本通訳学会会員のうち、大学あるいは専門学校等で実際に通訳教育に携わっているものに限定したことなどが報告された。

[Session 1 (b)] 大阪外国語大学における司法通訳関連講座開催について（津田守）

続いて、大阪外国語大学大学院における司法通訳関連講座の開催について、同大学院の津田会員がその概要について説明した。同大学院での司法通訳関連講座は、およ

TSURUTA Chikako, "A Report on the Interpreting Pedagogy Workshop 2002."

Interpretation Studies, No. 2, December 2002, pages 166-177.

(c) 2002 by the Japan Association for Interpretation Studies

通訳教授法ワークショップ 2002

日本通訳学会 教育SIG「通訳教授法および教材開発研究プロジェクトチーム」主催

日程	9月1日(日)～2日(月)
参加費	無料(ただし参加にかかわる実費は自己負担)
会場	大東文化大学板橋校舎 研究棟5F 通訳演習室 (アクセスマップ)
参加予定者	染谷泰正、田中深雪、鶴田知佳子、河原清志、水野的、本郷好和、稲生衣代、鳥飼玖美子、柴田パネッサ清美、山下早代子、渡部富栄(敬省略: 受付順)
発表担当	以下の担当予定はこちらで適当に割り振ったもので、暫定版です。日時の移動や担当トピックの変更(以下に挙げたトピック以外のものも可)などの希望がある方は染谷までお知らせください。各スロットの形式は「発表」「模擬授業」またはその他の独自の形式のいずれでもかまいませんが、概要を(使用機器なども含めて)あらかじめ染谷までお知らせください。配布資料などは原則として各発表者が用意するものとさせていただきます。
使用可能機器	カセットテープレコーダー、ビデオ、同時通訳ブース、パソコン用プロジェクター、(LL設備はありません)
その他	(1) 獨協大学の永田小絵さんがオブザーバーとして参加されるそうです。 (2) 大阪外語大学の津田守さんがワークショップにオブザーバーとして参加されるとのことです(ただし、都合により2日目は午前中のみ)。せっかくの機会ですので、1日目の最後の懇談会のときに、大阪外語大で構想が進んでいる「多言語通訳翻訳学プログラム」についてお話しをお伺いできればと思っています。

1日目: 9月1日(日)

12:45	集合
1:00-2:00 PM	[S1] 全体討論・問題提起: 「通訳訓練法テキスト」および「教材データベース」について (担当: 染谷泰正)
2:10-3:10	[S2] 「通訳訓練と英語力強化」(担当: 河原清志)
3:10-3:30	休憩
3:30-4:30	[S3] 「通訳訓練法を援用した初～中級クラスの実際」(担当: 田中深雪)
4:40-5:40	[S4] 「英日同通の指導: 中～上級編」(担当: 水野的)
5:40-6:00	休憩
6:00-7:00	[S5] 「英日逐次の指導: 中～上級編」(担当: 鶴田知佳子)
7:30-	夕食・懇談会(自由参加)

2日目: 9月2日(月)

9:45 A.M.	集合
10:00-11:00	[S6] 「英日同通の指導: 初級編」(担当: 染谷泰正)
11:10-12:10	[S7] 「サイトラの指導」(担当: 稲生衣代)
12:30-1:30 P.M.	昼食
1:30-2:30	[S8] 「ノートテイキングの指導」(担当: 渡部富栄)
2:40-3:40	[S9] 「英日逐次の指導: 初級編」(担当: 本郷好和)
3:40-4:00	休憩
4:00-5:00	[S10] 全体討論: 総括(司会: 染谷泰正)
5:30	解散

*参加者の都合により、当初のプログラムを一部変更しています。

[連絡先]

染谷泰正 <someya@c.laoyama.ac.jp>
青山学院大学 文学部英米文学科助教授
〒150 渋谷区渋谷 4-4-25
研究室: G1012 (15号館ガウチャーホール)

(Aug. 2, 2002)

そ 30 年間の通訳経験をもつ津田会員が長年あたためてきた構想であり、「司法通訳翻訳学プログラム」という名称で、来年度より試験的に開講する予定になっているものである。科目としては、1) 法廷通訳翻訳のための基礎知識、2) 法務通訳翻訳のための基礎知識、3) 弁護通訳翻訳のための基礎知識、4) 警察通訳翻訳のための基礎知識の 4 つを、現場で対応する専門職の人に講師を依頼する方向で折衝中。現在は国立大学の独立法人化が進む移行期にあるため、来年度は現行のカリキュラムの中でマイナー科目として実施し、再来年から専門的職業人をこの分野で育てていくための学位プログラムとして正式に立ち上げることを目指している、とのことであった。

[Session 2] 通訳訓練と英語力強化（河原清志）

英語資格試験突破をめざす主として社会人の学習者に、通訳理論を用いた英語教育を実践している。さらに問題意識として、英語学習者を対象に教えている試みから得た経験を、逆に通訳訓練に応用できないかを考えている。

授業のやり方としては、英語を読ませて内容理解をさせるのに、「穴埋め問題」をさせてから、できるだけオンライン処理をするように指示して、できなければもう一度読ませてやりなおす。その後、単語理解から構文、全体の意味理解へとつなげるボトムアップ式のやり方で、順送り理解をさせて訳出させるようにしている。最後に同じ内容のものを吹き込んだ日本語テープを聞かせ、内容を理解したことを確認する。現在のプログラムのポイントは同じ教材を繰り返し使うことで、ひとつのテーマとして「教育問題」を扱っている。

リスニング教材の授業での使い方としては、シャドーイング、リテンション、サマライジング、クイックリスポンス、トランスレーション、関連した内容についての作文、および英語検定問題対策として 2 分間スピーチをできるようにする訓練などを行っている。個人的な問題意識としては、オンライン（順送り）で英語が理解できることと訳出ができることには違いがあるのではないか、と思っている。英語の内容が理解できても、それを的確な日本語に訳出できる通訳者の能力には必ずしも結びつかないと感じている、とのことであった。

以上のような概要の発表に対して、参加者からは以下のような質問やコメントがあった。

- 1) ボトムアップ処理ではなくて、未知語はトップダウンで類推ができることから（通訳者の場合も実際はそうしているケースが多い）、そういう指導も可能ではないか。
- 2) 読みのスピードを意識させる必要があるのではないか。
- 3) リテンションは受講者に評判のよいエクササイズであるが、この訓練が有効なのは母語に比べて弱い英語での処理回路を強化するための訓練になるのではないか。
- 4) 英語を聞かせて英語でメモをとり、そのあと英語でリプロダクションするエクササイズはディクテーションとどう違うのか。

このうち、1) については、河原会員の指導としては、参加者がなんとなく意味は理解できるけど、それより先になかなか進めない、という人のために、細かく区切って理解を下から積み上げたほうが英語の理解が伸びるという経験的な知見に基づいて現在のようなスタイルを採用しているという答えがあった。また、4) については、クラスでは内容を取ってほしい答えられたらよしとしているという答えであった。

総じて、河原会員の授業では、通訳訓練で用いられている各種技法—シャドーイング、サマライジング、リテンション、メモとり（通訳でいうノートテキングとは少し目的が異なるが）、リプロダクション、訳出—を盛り込んだ内容を、英語学習者の英語力強化のために実践していることがよく理解できた。また、従来の英語学校でありがちな、ただネイティブスピーカーの英語を聞かせる、あるいはタイムやニューズウィークの記事を読ませるといふ、「なんとなく理解」型から「もっと深く理解」できるようにするために、いろいろな通訳訓練の方法を取り入れ、一定の成果を挙げていることが理解できた。ただし、これは **content-based teaching** とどう違うのかという疑問が出されたことからわかるように、はたしてどこまでが通訳訓練手法を取り入れたことによる成果なのか、という点が不明確であるように思われた。しかし、河原会員の試みは、通訳訓練の各種手法を英語力強化のために採用し、一定の成果を挙げているという点で評価でき、さらに、そこでの実践経験を再び通訳教育の場にフィードバックすることが可能であるという点で、筆者は大いに期待がもてるものであると感じた。

[Session 3] シャドーイングを応用した初級・中級クラスの実例（田中深雪）

たまたま、8月に「通訳訓練法を応用した英語学習法」というテーマで、埼玉県の高校教員180名を対象としたワークショップの開催に立ち会った。このワークショップではおもにシャドーイングについて話をしたが、その際、シャドーイングの定義についていくつもの疑問が出された。ひとつのポイントは「どのくらいの遅れを伴うものがシャドーイングなのか」という点。もうひとつは呼称についてで、フォローアップ、パラレル・リーディング、サイレント・リーディング、あるいはリップ・シンク（リップ・シンクロナイゼーションの略）という声を出さないで繰り返す訓練、という用語も聞いたことがあるが、これらは同じことを言っているのか、それともそれぞれ異なったものについて言及しているのか、という声が参加者からあがった。また、シャドーイング練習をどのような目的で取り入れているかという点については、

- 1) ウォームアップに使う
- 2) リソース（精神資源）配分の訓練として使う
- 3) プロソディの強化訓練として使う
- 4) 同時通訳の導入として使う

などの意見があった。このうち、3) については、プロソディの強化訓練としてシャド

ーイングを行うのであれば、原則として「意味の区切り」を単位として行うべきであるという意見が出された。4) については、実際に自分が通訳訓練を受けたとき、逐次しかできなかったあとでシャドーイングをしたら、同時がかなりできるようになった経験がある、とのコメントがあった。そのほか、さまざまな英語のバリエーションを与えて違った英語に慣れさせる、発話スピードやプロソディの特徴を変えて練習する、などの訓練も可能などの意見があった。

今後の課題として、シャドーイングは (1) 通訳訓練における意義と、(2) 一般の語学教育における意義の両面があり、学会全体として、いま一度シャドーイングの定義を見直し、あわせてこれに基づいた学習教材を提案していくなどの努力が必要ではないか、という点が確認された。

[Session 4] 英日同時通訳の指導—中・上級編（水野的）

水野会員からはおもに、「通訳の方略」および「同時通訳の理論モデル」の2点にかんする発表があった。ここではこのうち前者の内容について簡単に報告する。

通訳の方略＝ストラテジーについて：通訳者になるためには、生まれつきの能力や学校での訓練のほか、現場を多く踏んでいること（経験）が必要とよく言われている。しかし、フォーマルな通訳教育という観点から、具体的に「何を教えるのか」(what to teach) という討議は実はあまりされていない。どう教えるか（指導法）、何を使うのか（教材）という点については NHK 研修所などでの講師会で討議されることはあるが、具体的に何を教えるのかについては十分な議論がなされていない。背景知識も必要なことの一部に入るかもしれないが、各分野の専門知識は外して、「通訳技能」ということになると、いわゆる「通訳の方略＝ストラテジー」を教える、ということになるだろう。

情報として入ってくる談話の内容をどう抽出あるいは圧縮するのかという点では、例えば T. A. van Dijk や Walter Kintsch らに代表される認知心理学者の唱える「一般化」「省略」「追加」「融合」などの方略がよく知られている。また、プロ通訳者の使っている実践的な方略として、明確に訳出できない副詞・形容詞はイントネーションを利用して伝達するなどの技法もある。

練習としてはパラフレーズ、つまり別の表現で言い換える、あるいは意味の抽象化、いくつかある一連の形容詞を1語に置き換えて言ってみる、というパラフレーズを提言している人もある。サイト・トランスレーションにしても、少しずつ情報をずらしながらテキストを見せたり、能動態を受動態に変えさせる、直接語法を間接語法に変えさせる、レジスター（フォーマルをインフォーマル、口語表現をフォーマルになど）を変えてパラフレーズするなどの方法がある。

Robin Setton は、1) 待って意味をつかむ、2) 意識的に訳出を遅らせる、3) 意味のない言葉を（フィラー）入れながらのチャンキング、4) 予測、などの方法を提案して

いる。Daniel Gile は、1) 理解するまで (=文脈が明らかになるまで) 対応を遅らせるという方略や、2) 文脈から復元する、3) パートナーの協力を得る、4) ノートをとる (特に数字、固有名詞)、5) EVS (ear-voice span : 聞いてから発話するまでの時間または距離) を早めたり遅らせたりして変える、6) 上位概念と一般化を使う、7) パラフレーズして別の言葉で訳出する、などの方略について言及している。

AIIC の前会長 Gerard Ilg 氏は、かつて言語の組み合わせや訳出の方向によって固有の方法があるという主張をしたが、これは多くの人に否定された。理解さえすれば、言語の組み合わせにかかわらず通訳は可能であるという反論がなされている。

通訳のドメインスペシフィックな基本的テクニックについては、同通については「順送り」あるいは「頭ごなしの訳出」など、誰が書いてもほとんど同じであり、水野会員も同通の訳出方略について 2002 年版の『通訳事典』その他で発表している。

いずれにせよ、「何を」教えるかについてはもっと活発な議論が展開されてしかるべきであり、そのうちの中心課題となるであろう「通訳方略」の中身についても、今後、Setton や Gile の「方略リスト」をより精緻化していくべきであろうという点で、参加者の意見は一致した。

[Session 5] 英日逐次通訳の指導：中—上級編 (鶴田知佳子)

日本通訳協会の夏期講座で、最上級のレベル 3 の指導を 2 日間担当したが、その一環として、ネイティブスピーカーを招いてスピーチをしてもらい、そのスピーチを逐次通訳する演習を行った。このセッションではその実践報告をする。

なお、実際の国際シンポジウムの流れがどうなっているのかをつかんでもらうために、ネイティブスピーカーのスピーチの前に、司会役や会議の主催者役、質問者やコメントをする人の役割を受講生の中から選んで設定した。これは、国際キリスト教大学 (ICU) で本郷会員、東海大学で小沢会員が実際にとりいれているやり方でもある。

この夏期講座に対する受講生の反応は全体としてかなりよかったように感じている。実際にロールプレイを用いることで、通訳者になることを目的としない受講生(事前に挙手で確かめたところ、通訳者になるのが目的で受講していない人が半数近いことが確認できた)にとっても、興味をもって学習できる内容となったのではないかと考えられる。

この手法について、ワークショップ参加者からは、授業に取り入れるには面白いアプローチであるが、手間もかかるので、担当者をおいてその準備ができるような体制でないとなかなか、やっていくのは難しいのではないかというコメントがあった。また、これに関連して、模擬裁判を取り入れた司法通訳の訓練や、法廷ビデオを用いた訓練についての紹介があった。

今後の課題としては、受講生のさまざまなレベルや関心分野のばらつきがある中で、どのようにネイティブスピーカーを設定するのか、訓練の有効性をどのように測るの

か、1 回だけの切り離された経験ではなくて、どのように授業全体のカリキュラムの中で位置付けていくのか、などの点で検討が必要であることが指摘された。

2 日目

[Session 6] 英日同通の指導：初級編（染谷泰正）

染谷会員は独自に開発した訓練プログラムを使った授業を展開しており、そのプログラムの一部は研究資料としてプロジェクトチームのメンバーにも配布されている。今回のワークショップでは、そのプログラムのうち「英日同通訓練」に関する以下の演習についての説明があった。なお、このプログラムでは基礎訓練を終えたあと、大体 4～5 週目から実践編に入るが、実践編は「同時通訳編」と「逐次通訳編」の 2 つに分け、どちらから先にやってもよい形になっている。通例、染谷会員の授業では「同時通訳編」を先行させているとのことであった（より正確に言えば、同通初級→逐次初級→同通中級→逐次中級→同通上級→逐次上級のように、スパイラス式に展開しているとのことである）。したがって、以下の 4 つ（演習 9 は時間の都合により省略）の演習は同時通訳初級編に相当するものである。

演習 7：順送りの訳と同通文法

演習 8：サイト・トランスレーション

演習 10：同時サイトラ（原稿付きのスピーチ同通）

演習 11：同時通訳（原稿なしの同通）

以上の 4 つの演習課題について、その目的および具体的な指導方法などについて説明があったあと、質疑応答に入った。参加者のコメントとこれに対する答えとして、次のようなものがあった。

Q1) サイトラの練習のときに、文を適当なチャンクに区切って処理をしていくが、この際、スラッシュの入れ方（＝区切り方）をどう指導しているのか。

A1) 文の区切り方には一定のルールがあるが、あらかじめルールを教えるのではなく、練習の中で学生が自らルールを発見していくような方向で指導している。ただし、最初からそう言ってもなかなかできないので、演習 7 では代表的な構文を使って、このような構文のときはこのような原則が適用できる、といったことを指導し、その後、演習 8 でその発展練習をするようにしている。

Q2) 前記のような方法は、学生の側に基本的構文の理解や一定の文法力がないと難しいのではないかと。最近は基本的文法用語さえ知らない大学生が増えている。

A2) 通訳訓練ではなく、英語力のやや落ちる一般学生（または社会人）を対象にした「英語クラス」でサイトラを導入する場合は、たとえば V O A の Special English News のような素材を使い、「聞き読み」しながらチャンキングする指導を行っている。この方法ならば、元の音声（そのプロソディ信号によって）チャンキングのポ

イントを明示的に示してくれるので、学生にとっても比較的容易に練習を進めていくことができる。

Q3) 生徒の訳文に対して、どのような観点から改善の指導をしているのか。

A3) 基本的なスタンスとしては、原文の表層構造どおりに正確に訳出するというのではなく、原文の“communicative intention”を解釈し、その解釈を自分の言葉で表現すること、およびその表現を「経済性の原則」に基づいてできるだけ簡潔に行うということを目指している。したがって、指導はおもにこの2点に関することに集中している。

Q4) 同時通訳のEVSの練習について、どの程度のずれが適切と考えるか。

A4) 同時通訳の基本方略として「即時処理 (immediate response)」と「遅延処理 (wait-and-see)」の2つがある。実際の同通ではこの2つを適宜使い分けて作業を進行させていくが、基本的には「即時処理」を原則としながら、状況に応じて「遅延処理」を採用するということであると考えられる。「即時処理」の場合の処理ユニット一したがつてEVSは「意味のまとまり」ということになるが、これは必ずしも起点言語の文法構造に対応しない。言い換えると、「意味のまとまり」とは「命題」のことであり、同通のEVSは原則として命題ユニットを単位とするものと考えている。ただし、場合によってはひとつの命題ユニットが終了しても意図的にその部分の訳出を遅らせたり、あるいは遅らせた結果、次の命題ユニットと統合されて現象的には省略されたように見えることがある。いずれにせよ、EVSを文法構造に対応した形であらかじめ定義し、これを機械的に適用していくことは適当でないとする。

Q5) 授業では同時通訳練習を先行させているとのことであったが、逐次通訳が満足にできないうちに同時通訳をさせるのはいかがなものか。

A5) 逐次通訳より同時通訳のほうが難しく、したがって訓練は逐次通訳を先行させるべきである、という見解には根拠がない。同時通訳は逐次通訳の延長上にあるものではなく、両者にはそれぞれに特有の難しさや課題がある。したがって、どちらかの練習を積めばもう一方も自動的に上達するというものではない(ただし、逐次通訳の訓練の結果として全体的な語学力が上がり、その効果として同時通訳も上手になるということはある)。同時通訳の訓練上の課題は、煎じ詰めれば(1)スピードの問題と、(2)これに対応するための情報処理=訳出方略の習得の2つであると考えられる。したがって、同通訓練ではこの2点に特に力を入れている。このうち(1)については、まず100 wpm (words per minute) 程度の素材からはじめ、120 wpm、140 wpm、160 wpm と徐々にスピードを上げていくようにしている。従来はこのように学生のレベルや指導目的に合わせてスピードをコントロールすることは難しかったが、現在はデータをデジタル化しておけば、音声だけでなく映像データの場合もほぼ自由に再生速度をコントロールできるようになっており、この技術を大いに活用すべきであるとする。

以上のほかにもさまざまな質問が出され、活発な議論が展開された。全体として、染谷会員の指導法は、導入レベルから、技術を具体的に自分のものとして身に付けるまで、生徒に実際にやらせて考えさせるというところがポイントであると感じた。また、通訳練習に当たって、「今日は細かい情報までの確に訳出するように」とか「今日はおおまかな大意だけを簡潔にまとめるように」というように、訳出の基本方針をあらかじめ明確にしておくべきであるという指摘は非常に参考になった、という参加者の意見が多かったことも付け加えておきたい。

[Session 7] サイトラの指導（稲生衣代）

NHK 国際研修所で通訳クラスを指導しているが、自分の担当クラスの目的は「逐次通訳」の完成である。そのため、サイト・トランスレーションは逐次をする前の段階で導入する訓練として、全部で7回のクラスの中で、2～3回程度行っている程度である。練習のやり方は、まずスクリプトを通読し、その後、順次口頭で訳出させ、コメントするという形式である。

稲生会員の発表の中で、「サイト・トランスレーション」と「スラッシュリーディング」との違いについての質問が出たが、スラッシュリーディングは基本的には訳出を目的とした練習ではなく、リーディング（またはリーディングの際の情報処理）の方便として導入しているもので、一方、「サイト・トランスレーション」は理解した内容の「訳出」にフォーカスを置く訓練であるという点で、まったく性格を異にするものであるという点で参加者の意見は一致していた。

この点に関連して、予備校や中学・高校の現場で導入されている「スラッシュリーディング」の練習では、「英語の語順のまま訳出する」という指導がなされているケースがあり、結果的にフレーズごとに日本語に置き換えただけのごく不自然な訳を学生に作らせてよしとするケースが少なくなく、この点についても、すでに議論が出たシャードイングと同様に、通訳学会として何らかの対策を講じていく必要があるのではないか、とのコメントがあった。

サイトラ指導の課題としては、1) 適切な意味の区切りを即時に判断する能力の養成、および 2) ソーステキストの表層構造に引きづられずに、「意味」を抽出して即時に言語化する能力の養成、の2点が中心となるが、参加者の一致した見解としては、サイトラは単なる英文読解ではなく、きわめて高度な認知的処理を必要とする総合的な言語運用力強化訓練として有効な手法であり、今後、従来の「同通の基本訓練」という枠組みを超えて、もっと幅広く語学訓練の場に導入されてしかるべきものであることが再確認された。

なお、放送通訳に従事している参加者からのコメントとして、実際、放送通訳の現場でも、英語ではない言語で流れている音声のほかに、画面上に出ている英語字幕をもとに日本語に通訳する（しかもその英語字幕は順次消えていく）という非常に難度

の高い同時通訳が必要となることもあることが指摘された。また、一般の通訳においても、通訳現場で「これを訳してください」とその場で文書を渡される場合があるが、そのような場合に備えて、サイトラの訓練を積み、必要な技術を身に付けておく必要がある。したがって、サイトラは、逐次通訳、同時通訳と並んで、通訳の「第3の領域」として認知し、そのような観点から指導に当たるべきである、との意見が出された。

[Session 8] ノートテイキングの指導（渡部富栄）

現在、日本通訳協会主催の通訳コースで、かなりレベルの開きのある人たちを教えている。目標はコース終了後、ビジネス通訳ができる程度の力をつけるということである。ノートテイキングの指導は、授業全体の半分が終わったくらいの段階で導入している。まず、第1週目にノートテイキングについての基本的な説明と練習を行い、次の週にはホワイトボード上で1回に2人ずつノートテイキングの練習をさせる。ここでは、メカニカル訓練として1分間スピーチをおもに練習し、最後の2～3セッションで長いスピーチを対象にしたメモ取り通訳をさせている

全体的な注意点としては、ノートは全体の談話構造がわかるような形式でとること、とくに重要なディスコース・マーカは必ず書き取っておくように指導している。なお、ノートは日本語・英語どちらで取るのかという質問を必ず受けるが、基本的にはどちらでも効率よく取れるほうを臨機応変に使えばよいと指導している。また、必ずしも言語という形式にとらわれる必要はなく、独自の簡略表現を使ったり、各種の記号を活用することも勧めている。

発表の後、参加者からの意見・感想として出たおもな点は次のとおりである。

1) 渡部会員の指導の方法は、要するに談話ユニットを「テーマ」と「レーマ」の2つに分け、ノートの左側に「テーマ（＝何が／誰が）」を、右側に「レーマ（何だ／どうした）」に相当する情報を配置するというものであり、訓練のポイントをこの「枠組み」の習得に置いている点は、従来の「とにかくやってみなさい」式の指導法に比べて大いに評価すべき点である。

2) ノートテイキングの導入をいつにするのかという点で、学生（受講者）のレベル差にかかわらず一律に導入するのはいかなるものか。ノートテイキングは、理解が十分にできていることを前提に行うべきものであり、聴解力に問題がある学生に対してノートテイキングの指導をするのは意味がないのではないか。

3) 何をノートにとるか、という点に関して、ひとつの方法として「キーワード」だけをとるように指導し、そこから全体を再構成していくように教えている。話の全体が理解できていれば、キーワードだけをたよりにして、かなり正確に全体を再現できるはずだ。

4) センテンス単位の通訳では数字や固有名詞だけをノートにとっておくだけで十

分であり、とくにノートテイキングの訓練が必要になるとは思われない。ただし、数センテンスあるいはこれを超える長さの発話を対象にする場合には明らかに短期記憶の容量を超えるデータを扱うことになる。したがって、ノートテイキングは人間の短期記憶の容量の限界を補うための手段として通訳者にとって必須の技術であり、これをどう指導するかについては、今後、もっと本格的な研究がなされてしかるべきである。

なお、質疑応答の中で、現場で通訳者が実際にとるノートと、教室で指導するノートテイキングの方法・内容が必ずしも一致しない点が話題となった。例えば、教室では何でもノートにとるのではなく、選択的にとるようにと指導するのが通例であるが、通訳者の中にはあたかも聞いたことをそのまま羅列しているように見えるノートをとる人がいる。これはどのように理解すべきか。これについて、ひとつの仮説として、同時通訳のときの訳出を早く出すタイプの人には、ノートも単語を並べただけの（ように見える）ものを書く傾向があるが、その人にとってノートは単なるバッファにすぎず、おそらくノートをとりながら同時に頭の中で情報を整理しているのではないか。したがって、通訳をするときには、この「ノート」のほかに、頭の中に既にできあがっている、より整理された「スケッチパッド」を参照しているのではないかと考えられる、という意見が出された。いずれにせよ、これは興味のある課題であり、今後の実証的な研究が期待される分野である。

[Session 9] 英日逐次通訳の指導：初級編（本郷好和）

本郷会員が ICU で教えている 3 つのクラスのうち、特に導入部分についての詳しい紹介があった。まず、コースの開始に当たって、通訳の目的と役割についてのディスカッションを行い、併せて基本的コミュニケーションモデルを提示する。特に、受験英語の逐語訳方式の考え方を引きづっている学生には、通訳における訳出は表層レベルの置き換えではなく、起点言語で表現された「意味」、あるいはその「イメージ」をいかに他の言語で再現するかという作業であることを強調して教えるようにしている、とのことであった。

具体的な練習方法のひとつとして、自己紹介の通訳を取り入れている。この練習では、クラスを、スピーカー、通訳者、聞き手（聴衆）の 3 つに分け、その役割を変えながら進行させる。もうひとつの練習方法として、アメリカ旅行中にたまたま見つけた 3 匹の子豚のパロディー（狼からみたバージョン）を題材として、字面の訳出ではない創造的な訳出のための練習素材として使っている。この練習は学生にはきわめて好評で、同時通訳の導入にも使っている。

また、春学期には『イミダス』などをベースとして、分野別の知識を吸収させるために、あるトピックを選び、それを理解して説明するという練習をさせている。また、秋期の同時通訳クラスでも新書本を使って同様の作業をさせている。トピックは何で

もよいが、特定分野の内容を自分の言葉で語れることを主眼としている、とのことであつた。

資料を使った詳細な発表のあと、活発な質疑応答が行われた。質問は多岐に渡つたが、特に、本郷会員ならではの特征として、さまざまなゲーム的手法による通訳訓練や模擬国際会議など、学生の参加意欲を高める工夫が授業の中にふんだんに取り込まれている点が高く評価された。また、通訳訓練を単なる言語スキル訓練としてではなく、背景知識の強化や、これをベースにした発信力の強化を含めた総合的な学習の機会をとらえている点も大いに参考にすべきところであると思われた。なお、ICUでは通訳上級クラスは今のところ設定されていないため、学生は本郷会員の指導する3つのクラスを受講したら、それ以上の通訳のクラスはないのが現状とのことであつた。

*

以上、ごく簡単ではあるが、日本通訳学会教育 SIG 有志による第1回目の「通訳教授法ワークショップ」の概要を報告した。筆者なりに結論めいたことを言えば、今回のワークショップにおいて、実際にほかの人たちがどのように工夫して教えており、どのような問題意識を持っているかを直接見聞できたことは非常に有意義であつたと感じている。また、2日間のディスカッションを通じて、通訳訓練において何が大事かを再確認できたことも意義深かつた。来年は、これをさらに発展させ、よりいっそう充実したワークショップとなることを期待したい。

筆者紹介：鶴田 知佳子 (TSURUTA Chikako) 目白大学助教授。日本通訳学会理事。コロンビア大学経営学大学院卒業。経営学修士 (MBA)。6年間のイタリア、ミラノ在住経験より、イタリア語も話す。合計およそ10年ほどの金融機関勤務を経て1999年より目白大学助教授。NHK 衛星放送通訳者、CNN 同時通訳者、会議通訳者。近年は実践に役立つ通訳教育法の研究に関心を持っている。
